

志賀直哉「清兵衛と瓢箪」の深層

——「暗夜行路」との関わり——

寺杣 雅人

五十嵐景子 荻巢 健人

瀬島 紘久 中村 綾子

はじめに

「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」はともに志賀直哉の著作であるが、両者から受ける印象は大きく異なる。

「清兵衛と瓢箪」は四百字詰め原稿用紙でわずかに十枚余りの小編、対して「暗夜行路」は千枚を超える長編である。まず総量において雲泥の開きがある⁽¹⁾。

そして何といっても両者を隔てるのはその内容であり、読後感である。「清兵衛と瓢箪」は瓢箪に熱中する少年・清兵衛とそれを理解しない大人たちの

対立を描いた好編で、中学校や高校の教科書にも掲載されてきた。「暗夜行路」では、「母と祖父との不義の兒」⁽²⁾である主人公・時任謙作がそのために苦しみ、自らの結婚生活においても妻の不義に遭うという深刻な生涯が描かれ、日本近代文学を代表する作品と位置づけられている。

「暗夜行路」を重にして大とすれば、「清兵衛と瓢箪」ははるかに軽であり、また極めて小である。両者の間には大きな懸隔がある。

が、実はこの二つの作品には注目すべき共通項がある。「清兵衛と瓢箪」は、直哉が尾道にやってきた大正元年初冬に書かれているが、昭和十二年に完

成する「暗夜行路」も、草稿が書き始められたのはその二十四年余り前で、同じ大正元年初冬の尾道である。つまり、「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」⁽³⁾は、千光寺山南斜面の棟割長屋の一室⁽⁴⁾で一人の青年作家によって同時に書き進められていたのである。趣を異にする「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」であるが、その内部になんらかの接点をもっていたとしてもおかしくはない。

およそ百年前の初冬の尾道に立ち戻り、当時二十九歳であった著者が瀬戸内の島影を望む棟割長屋の一室で記した筆の跡をたどってみたい。そして改めて「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」との関わりを探ってみたい。そこから「清兵衛と瓢箪」をとらえ直すことはできないか、本稿はその可能性を追求しようという試みである。

一 「清兵衛と瓢箪」における父と子

志賀直哉が尾道にやって来たのは大正元年十一月十日（日）で、翌々日の十一月十二日（火）に船で四国に渡っている。その船上で耳にした少年と瓢箪にまつわる話をもとにして生まれたのが「清兵衛と

瓢箪」であった。「清兵衛と瓢箪」は、約一ヶ月半後となる大正二年元日の『讀賣新聞』第六面に掲載されている。

「清兵衛と瓢箪」では、優れた瓢箪を選び、それを磨き上げて美術工芸作品にまで仕立てる清兵衛とそうした清兵衛の行為を理解できず、理解しようとしめない大工の父親が登場する。作者である志賀直哉と父親の直温との積年の対立を知る読者ならば、この物語の父子に作者自身の現実の父子関係を見ることがなるかもしれない。

実は、作者は自作解説「創作餘談」⁽⁵⁾で、この作品の執筆動機と自身の父親との関わりについて次のように述べている。

「清兵衛と瓢箪」これはこれに似た話を尾の道から四國へ渡る汽船の中で人がしてゐるのを聴き、書く氣になつた。材料はさうだが、書く動機は自分が小説を書く事に甚だ不満であつた父への私の不服で、……

「材料」は船中の噂話から得ているが、「書く動機」は父直温への「不服」であつた、と説明しているのである。瓢箪をめぐる清兵衛と父親の関係と、小説家を志す作者とそれを認めない父直温の関係が

重なつて見えるとすれば、もともとそれが作者の企図したところであつたからであろう。

ただ、父子の対立する図は、作者の企てを俟つまでもなく、はじめからこの「材料」に含まれていたものである。船上で原話に接した日の夜、直哉は道後温泉でその内容を次のように書き留めている⁽⁶⁾。

ある小供が、二十錢で瓢箪を買つて、それを學校へ持つて行つたら先生に大變叱られて、自家まで小言を云ひに來たのださうだ。それで其小供は又兩親からヒドク怒られた。親爺は大工で追ン出すといふ程の騒ぎだつたといふ。母親はその瓢箪は直ぐ道具屋に賣つて了ふつもりで、持つて行つた。所が道具屋が二圓で引きとらうといつた。それを聞いた母親は若しかするとこれは餘程いゝ物だと思つて、それでは賣れないといつた。商人は五圓に上げた。横着な母親はそれでも離さなかつた、とうとう七円まで上げて漸く手離した。中々皮肉な話だ。

原話では母親の登場回数が父親よりはるかに多く、子を叱りつけて取り上げた瓢箪の思いがけない評価から子の類まれな才能が明らかになるといふ「中々皮肉な」展開にも、その「横着な」性格とと

もに母親は大いに関与している。しかし、「追ン出す」とまで言う「親爺」と、言われるしかない「小供」の対照的な関係も確かにここに描かれている。

そもそも志賀直哉が尾道に向かつたのは「本統の小説家」⁽⁷⁾になるためである。そしてその尾道で「幼時から現在までの自傳的なもの」⁽⁸⁾を書こうとしていた。「自傳的なもの」とは、もつと具体的にいえば、「永年の父との不和を材料としたもの」⁽⁹⁾であつた。

その「父との不和」の類例が船上で偶然耳にした話の中に挟まれていたのである。直哉がそれに目を向けないはずはないであろう。おそらくこの時、「讀賣新聞」への執筆依頼を受けていたであろうから、この原話を「材料」にして書けば、直哉の所期の目的はある程度達成されることにもなり、いわば一石二鳥であつた。

こうして「父との不和」は、まず「清兵衛と瓢箪」において清兵衛とその父親に仮託して間接的に表現されることになるのであり、一方「清兵衛と瓢箪」とともに執筆されていた「暗夜行路」、正確にいえば「暗夜行路草稿」にはそれはそのまま直接的に描かれることとなつた。

ということとは、「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」は、順当に執筆が推移すれば、ともに「父との不和」というモチーフの上に形成されるということになったのであるが、完成した「暗夜行路」には父直温と子の直哉の対立の構図は見えない。それはなぜか。

二 「暗夜行路」における父子の変容

「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」（正確にいえば「暗夜行路草稿」）は、大正元年初冬の尾道で同時に書き始められた、とこれまで述べてきた。それは間違いないのであるが、「暗夜行路」についてはまだ若干の補足説明を必要とする。そのとき「清兵衛と瓢箪」と同時進行で執筆していた作品の標題は「暗夜行路」ではなく、直哉の「續創作餘談」によれば、それは「時任謙作」であつた⁽¹⁰⁾。

私は作品によつて、樂に出来る事もあるが、時々随分手古摺る事がある。「暗夜行路」は中でも手古摺つた物と云へるが、本統に手古摺つたのは「暗夜行路」の前身である「時任謙作」といふ所謂私小説の時だつた。大正元年の秋、尾道の道にゐた頃から書き出し、三年の夏までか

つて、どうしても物にならなかつた。

自身と父直温との対立を軸とした「時任謙作」という標題の自伝的小説を尾道で書き始めたのだが、うまく行かず、約二年後に執筆をあきらめたという。そしてその後（「時任謙作」の内容は可能なかぎり受け継ぎつつも）、主人公を母と祖父との間に生まれた不義の子というまったく異なる人物として仕立てるとともに標題も「暗夜行路」と改めた、というのである。その結果、当然の帰結であろうが、実際に自身の体験した父直温との不和が描かれない作品へと変化したのであつた。

「續創作餘談」では、自伝的小説の「時任謙作」を放擲することとなつた理由について、直哉は次のように述べている。

「暗夜行路」の前身「時任謙作」は永年の父との不和を材料としたもので、私情を超越する事の困難が、若しかしたら、書けなかつた原因であつたかも知れない。然し間もなく私は「和解」といふ小説に書いたやうな経緯で、大變氣持のいい結果で父と和解をした。和解してみれば「時任謙作」といふ小説に對する私の氣持は變化して來た。ことに父との不和を「或る男、其姉の

死」といふ弟の立場でそれを見るといふ、比較的公平に批判出来る形で書いて了ふと、「時任謙作」を今更書き續けなければならぬといふ氣持が段々なくなつて來た。長篇を書きたい氣はあつても、今までの主題には興味がなくなつて來た。

また、「暗夜行路」で主人公が母と祖父の不義の子という虚構を導入したことに對して、「前に尾の道で此長篇（ここでは「時任謙作」―引用者注）を書きつゝあつた頃、讃岐へ旅行をして屋島に泊つた晩、寢つかれず、色々と考えへてゐる内に、若しかしたら自分は父の子ではなく、祖父の子ではないかしらといふ想像をした」ことがきつかけであると述べている。そしてそのように想像したのには理由があつた。「續創作餘談」では、それを次のように説明している。

私が物心つかぬ頃、父は釜山の銀行へつとめてゐた事があり、また金澤の高等學校の會計課につとめてゐた事があり、しかも其時私の母は東京に残つてゐた。それに、私が十三の時に三十三で亡くなつた母の枕頭で、祖父が「何も本統に楽しいと云ふ事を知らさず、死なしたの

父は其時泣かなかつた。此印象は後まで私に残つてゐて、父に對する反感になつてゐたが、自分が若しかしたら祖父の子ではないかしらと云ふ想像をすると、かう云ふ記憶が全く別な意味をもつて私に甦つて來た。

自伝的小説「時任謙作」は、当然直哉自身の體驗に基づいて書かれるはずであつたのだが、「暗夜行路」と改題し、不義の子という、自身とはまったく異なる境遇の主人公をこしらへることになつた。だが、その虚構の発端は、やはり想像として實際に自身の身の上で起つたことであつたのである。

ついでにもう少し直哉自身の語る「時任謙作」から「暗夜行路」への「移轉」の経緯を拾つておこう。これも「續創作餘談」に記されている。

月夜の屋島の淋しい宿で寢つかれぬままに私がした想像は如何にも馬鹿氣たものだつた。翌朝起きた時には自身それを如何にも馬鹿々々しく感じたが、私は我孫子で今は用のなくなつた書きかけの長篇を想ひながら不圖此事を憶ひ出し、さういふ境遇の主人公にして、それを主人公自身だけ知らずにゐる事から起る色々な苦みを書いてみようと思ひついた。此想ひつきが「時

任謙作」から「暗夜行路」への移轉となつた。

年譜には、直哉の尾道時代にあたる大正二年二月の項に、「氣分轉換のため琴平、高松、屋島を旅行」とあるが、「月夜の屋島の淋しい宿で寝つかれぬままに私がした想像」というのは、この旅での出来事であろう。

繰り返すことになるが、「大正元年の秋、尾の道にみた頃から書き出し、三年の夏までかかつて、どうしても物にならなかつた」のは、厳密にいうなら、「暗夜行路」ではなく「時任謙作」であつた。したがつて、千光寺山の棟割長屋の一室において、「清兵衛と瓢箪」と同時進行で書かれていたのは、「時任謙作」の草稿であつた。

（現在「時任謙作」を書くための草稿も、「暗夜行路」を書くための草稿も一緒にして「暗夜行路草稿」と呼んでいるが、やや紛らわしい呼称と言わねばなるまい。）

三 「暗夜行路草稿」と「暗夜行路」における直温と直哉

「暗夜行路」は、自伝的な長編を書こうとして書

き始められた小説である。

この「暗夜行路」の草稿は、全集を編纂する際、「暗夜行路草稿」と命名され、おおよその執筆時期とその内容によつて36に分けられている。ここでは、この36の「暗夜行路草稿」のうち、1から27を「時任謙作草稿」、「暗夜行路」という標題がはじめて出現する（実はここではじめて「時任謙作」という名の主人公も登場するのだが）28から36を「暗夜行路草稿」とする。これは、前章で見たように、直哉本人の言葉に従つた分割である。

自伝的なものとして書き始められた「時任謙作草稿」は、果たして、「暗夜行路」の中に生かされているのだろうか。ここでは、本稿でいう「時任謙作草稿」から父と子の関係がはつきりと見える出来事を抜き出し、それが「暗夜行路」の中に見られるかどうか、表にまとめてみた。表は直哉が尾道到着を境として、到着前と到着後の二つに分けている。また、直哉の日記や年譜を参考にして、直哉の年齢を追う形でまとめてある。

表の一番上には通し番号を付している。次の「年齢（年月）」の欄にはその出来事が起こった時点の直哉の年齢を、その次の「出来事」の欄には日記や

年譜に見られる出来事を書いた。その下の「概要」に出来事の概略を、また、「時任謙作草稿」の欄にはその出来事が草稿内のどこに見られるかを書き入れた。一番下の「暗夜行路」への移行の有無」の

欄には、「暗夜行路」にその出来事が見られた場合は○を、見られない場合は×を記入した。ここから表に従って草稿と「暗夜行路」の違いを見ていくことにする。

尾道到着以前の出来事

年齢 (年月)	出来事	概要	「時任謙作草稿」	「暗夜行路」への移行の有無
① 幼少期	父と相撲をとる	父は負けてくれず、帯で縛られる。そんな父が「父」に見えなくなり、大声で泣いてしまう。	436頁16行目～437頁7行目 草稿27	○
② 青少年期	作家になることを決める	父と同じような仕事に就こうとしていたが、作家になることを決める。	416頁14行目～417頁1行目 草稿21	×
③ 二十三歳 (明治39年 8月)	洋服屋で服を作る	父に黙って、高いと言われている洋服屋で制服や外套を作る。それを父にとがめられる。「彼」もすぐに喧嘩腰になる。	244頁1行目～6行目 草稿13 39頁3行目～40頁13行目 草稿2	×

⑦	⑥	⑤	④
<p>二十九歳 (大正元年 10月25日)</p>	<p>二十九歳 (大正元年 10月24日)</p>	<p>二十四歳 (明治40年 9〜1月頃)</p>	<p>二十四歳 (明治40年 9〜10月)</p>
<p>自活すべく家を出る</p>	<p>本の出版をめぐる父と対立する</p>	<p>父と鉄道会社従業員が対立する</p>	<p>女中との結婚に反対される</p>
<p>父から受け取った小切手のお金を引き出して「彼」は家を出る。母は父の留守に出ることを止めたが、「彼」は早く出たくてたまらなかつた。</p>	<p>本を出版する旨を伝える父のところに行く。小説を書くことを馬鹿にされる。自活の提案をされ、承諾する。</p>	<p>父と鉄道会社の社長が受け取る金が多いのではないかと使用人たちが自家に押しかけ、父に抗議する。女中との結婚でもめていた時期だったが、使用人が父に暴力を振るわないかと父の身を案じる。</p>	<p>信行は自家にいた女中、千代と結婚しようとしたが、父はどうしても許さなかつた。</p>
<p>28頁後ろから12行目〜28頁後ろから7行目 [草稿2]</p>	<p>23頁7行目〜24頁17行目 [草稿14] 316頁後ろから9行目〜322頁13行目</p>	<p>278頁11行目〜279頁9行目 [草稿13] 36頁後ろから10行目〜38頁6行目 [草稿2]</p>	<p>231頁16行目〜232頁1行目 [草稿13] 36頁後ろから11行目〜後ろから10行目 [草稿2]</p>
<p>×</p>	<p>×</p>	<p>×</p>	<p>×</p>

⑧	二十九歳 (大正元年 10月30日)	実家を出た後の 父の反応を聞く	自分が出て行った後に気落ちしていたという父の様子を聞いて、動揺する。	草稿2 31頁3行目～32頁8行目	×
---	--------------------------	--------------------	------------------------------------	----------------------	---

尾道到着後の出来事

○大正元年11月10日…尾道に着く

①	二十九歳 (大正元年 11月頃)	実家からの手紙 で父の気持ちを 知る	父は「私」が尾道で仕事せず にいいかげんな日々を送って いることを不快に感じており、 そのように不快に思われている ことが「私」を苛立たせた。	「時任謙作草稿」 草稿5 70頁13行目～71頁3行目	×
②	二十九歳 (大正元年 11月頃)	友人からの手紙 で父の気持ちを 知る	「私」の元へ、友達から手紙が来る。 その内容は、父が「私」の 帰宅を望んでいることが書かれて いた。父と深く親交をもったこと はなかったが、小さな好意にもうれし さを覚えた。	草稿5 71頁13行目～72頁6行目	×

(「草稿」本文の頁・行は、すべて『志賀直哉全集』補巻三(岩波書店、平成13年10月)による。)

この表に見えるように、最初に挙げた相撲を取る話（到着前の①）は、草稿と「暗夜行路」の両方にあるが、それ以外の出来事（到着前の②）⑧、到着後の①②）は、草稿にあるものが「暗夜行路」には全く出現していないことが分かる。

例外として、父直温との相撲の話が「暗夜行路」の序詞にほぼそのまま生かされているが、それは主人公時任謙作と実の父ではない父との間の出来事であった。序詞ではそうした父子関係であることの伏線となっているが、直哉自身が父直温に対して父親として親しめない気持ちをもっていたことが生かされた形ともなっている。

「清兵衛と瓢箪」とほぼ同時期、大正元年に尾道で書きはじめられた「時任謙作草稿」だが、直哉は大正六年に父親と和解し、当初目指していた、父との不和を含む自伝的な作品を書くことが難しくなってしまった。そこで、主人公が母と祖父の不義の子であるという設定を入れることにより、昭和十二年、「暗夜行路」を完成させた。父との関係を描いていた「時任謙作草稿」での出来事は、「暗夜行路」における親子の関係の中ではそのまま生かすことが難しいため「暗夜行路」に移行されなかったものと思

われる。

では、父との対立を描いた「清兵衛と瓢箪」と、対立が描かれなかった「暗夜行路」の間には、共通点はないのだろうか。

（本章の執筆は、五十嵐景子、荻巣健人、瀬島紘久、中村綾子による。）

四 「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」の接点

当初、「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」の両作品上に展開されるはずであった「父との不和」というモチーフは、「暗夜行路」における父子関係の変容によって「清兵衛と瓢箪」にのみ表現されることとなった。年譜にも見える直温と直哉の顕著な対立は、前章で見たように、「暗夜行路草稿」に、つまり「時任謙作草稿」には写されていたが、小さな例外⁽¹⁾はあるものの、「暗夜行路」では確認することができない。それでは、「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」の接点は、もはやどこにも見いだせないということになるのであるうか。いや、両作品には別の看過できない重要な接点がある。

「暗夜行路草稿2」（尾の道に行くまでの事）⁽¹²⁾ から

抜き出した一葉（12頁〜13頁に掲出）に注目したい。

この一葉を翻字すると、次のようになる。

（彼は又その空想から色々な事に肯定的な考へが持てた。彼は各國の軍事上の不愉快な悪い發達すら）も、人類の其の意志の一つの現はれかも知れないと考へた。それが結末でどういふ効果をおさめるかも知れないといふ氣がして來た。それから藝術上でも社會上でも時々起る突飛な新しい運動、それらもそれ自身を一つく評價する前に人類の其意志から出た現はれの一つとして見る時に大概好意が持てると思つた。彼は前よりも科學を尊敬する氣になつた。それから思想はその水先案内だと考へた。それから藝術の意義も其所に認めた。それは思想に暗示を與へる。それから病的な事、夢想的な事も尊重しなければならぬと考へた。それは普通の思考の道では飛び上がれない所に飛び上つて或る暗示をする。かう考へた。

（以下抹消部。原稿用紙の欄外に書き入れられた「トル」という指示のある部分を囲みの中に入れた。全集の本文では、「原稿七行抹消」とある。―引用者注）

結局男は仕事、女は子を生む事、を力強く完全に仕遂げねばならぬと考へた。而して何が惡事だと云つて、その意志を妨げやうとする位の惡事はないと考へた。かう考へた彼は直ぐ己れに對する父のやり方を頭に浮べてゐた。彼は彼が仕やうとする何へでも殆ど理由なく父が出て來て前へ立ちふさがるやうな事をするのに對して左う考へた。

この一葉に書かれていることからは、これ以前の數葉をふくめ、「暗夜行路」前編（第一ノ九）にある主人公時任謙作の日記の内容と合致している。この日記で時任謙作は、人類が地球環境の変化によりやがては滅亡する運命にあることをはっきりと認識しているのだが、それでもその運命に逆らつて人類の幸福と存続のために大いに尽くさねばならないと考へていることが明らかにされる。そしてそれはもともと、この「暗夜行路草稿2」（「尾の道に行くまでの事」。正確にいえば、「時任謙作草稿」）における彼（＝順吉）の考へであり、おそらく直哉自身の考へであつた。「暗夜行路」との繋がりは明らかであろう。

本頁(12頁)と次頁(13頁)に掲載されている「暗夜行路」草稿2の画像は閲覧できません。

本稿の広島県大学共同リポジトリへの登録は、著作権継承者である志賀道哉氏のご承諾を得ていますが、その他のよんどころない事由により、この部分の登録は差し控えざるをえなくなりました。あしからずご了承ください。

本稿の画像を含む全文を掲載した『尾道文学談話会会報』第4号を希望される方は、左記にお知らせ下さい。残部のあるかぎり、無償でおわけします。(送料着払い)

〒七三二一八五〇六

尾道市久山田町一六〇〇番地二

尾道市立大学芸術文化学部

日本文学科研究室

同様にこの部分が「清兵衛と瓢箪」へも繋がってゆくことは、「結局男は仕事、女は子を生む事」から始まる抹消部⁽¹³⁾にはつきりと示されている。ここに「彼が仕やうとする何へでも殆ど理由なく父が出て来て前へ立ちふさがるやうな事をする」とあるが、これは男の「仕事」を妨げる存在を直哉自身の体験から具体的に例示したものであり、この彼(＝順吉)はまさに直哉自身であり、父というのは間違ひなく直哉の父・直温である。つまり、男の「仕事」は人類の意志の顕現であつて、それを妨げてきた父・直温の行為は人類にとって最大の「悪事」だといふわけである。

直哉が尾道で書こうとしていたのは、前述したように、「幼時から現在までの自傳的なもの」であり、「永年の父との不和を材料としたもの」であつた。それは、換言すれば、「彼(＝直哉)が仕やうとする何へでも殆ど理由なく父(＝直温)が出て来て前へ立ちふさがるやうな事をする」ことであつた。そして、それがすなわち「清兵衛と瓢箪」という物語に潜むもう一つのストーリーなのである。

「清兵衛と瓢箪」の最後に「然し彼の父はもうそろ／＼彼の繪を描く事にも叱言を言ひ出して來た」

という一文があるのも、このことに関係してゐるであろう。つまり、原話に沿つた瓢箪だけの物語にせず、繪を描くことにも父の妨害を加えたのは、「彼が仕やうとする何へでも殆ど理由なく父が出て来て前へ立ちふさがるやうな事をする」という父のあり方をより近似的に表現するためであつたのではなからうか。

ただし、「清兵衛と瓢箪」はたんに父に対する不服を述べ、父の行為を男の「仕事」を妨げる最大の「悪事」として糾弾することを目的とした作品ではないであらう。

たとえば、この作品では、清兵衛の「仕事」を妨げるものとして「叱言」という語が用いられているが、これは先に挙げた最後の一文にある父の「叱言」に留まらない。教員による「叱言」も母親の「叱言」もあり、清兵衛の「仕事」はこれら三者の「叱言」によつて包圍されているのである。「仕事」の妨げるものを父親のみに限定せずに分散している点を見逃してはなるまい。もし、父親に不服を述べ、その悪事を糾弾するつもりならば、「叱言」の分散は得策ではないであらう。

また結末部には、次のような字句も挟まれている。

……清兵衛は今、繪を描く事に熱中してゐる。これが出来た時に彼にはもう教員を怨む心も、十あまりの愛瓢を玄能で破つて了つた父を怨む心もなくなつて居た。

新たな「仕事」に向かうことで周囲の妨害を過去のものとして超越していく清兵衛はたくましさを感じさせるが、ここでも「仕事」の遂行を妨げる、本来なら恨みに思うはずの人物を教員と父の二者に広げ、父に限定していかないのである。

確かにこれまで「清兵衛と瓢箪」は、「書く動機は自分が小説を書く事に甚だ不満であつた父への私の不服で」という作者自身の発言を重く見、いわば作者を取り巻く個人的事象の範囲で多く解されてきた。だが、いま前掲の一葉によつて、その個人的事象も実は「男は仕事」という、人類の共有すべき課題に対する妨げの一例でしかないことが明らかとなつた。人類の本務の一つ、「男は仕事」を清兵衛を通して表現すること。それは「小説を書く事に甚だ不満であつた父への私の不服」とは異なる、はるかに次元の高い、「清兵衛と瓢箪」を「書く動機」であつたと考えられる。

おわりに

大正元年初冬、千光寺山の棟割長屋で書き始められた「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」。やはり両者を繋ぐ接点があつた。

端的にいえば、それは、「暗夜行路草稿2」（尾の道に行くまでの事）に含まれる「結局男は仕事、女は子を生む事、を力強く完全に仕遂げねばならぬ」という表現に集約されている⁽¹⁴⁾。これは、人類として各人は何をなすべきか、という問いに対する解答である。「暗夜行路」では、「女は生む事。男は仕事」と順序が逆になつているが、やはりそれは「人類の爲め」になすべきこととして次のように提示されている。

女は生む事。男は仕事。それが人間の生活だ。

人間が未だ發達しない時代には男の仕事は、自分の一大家族、自分の一部落の幸福の爲めに働けばよかつた。それが段々發達して、一部落の輪が大きくなつた。日本なら男は其藩の爲に働く事で仕事の本能を満足させて居た。それが一國の爲め、一民族の爲め、そして人類の爲めといふ風になつた。

著者の念頭にあるのは、家族内のことやましてや父子関係ではないのは、明らかであろう。

「清兵衛と瓢箪」の方は、「男は仕事、女は子を生む事」から特に「男は仕事」を取り出し、その意義を一人の少年に託して表現したのである。瓢箪に向かい、あるいは絵画に向かい、どのような妨げに遭おうとも「仕事」を追求していく清兵衛は、あるべき男の姿、直哉の理想の人物を寓しているのではなからうか。

最後に、一言付け加えておきたい。

「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」を結ぶ「男は仕事、女は子を生む事」は、人類として各人は何をなすべきかという問いに対する答えであると述べたが、もともとこの問いと答えはトルストイの発したものであった。

トルストイはその『男女観』において次のように述べている⁽¹⁶⁾。

……凡そ人道の貢献は自から分れて二種類あり。一は人類幸福の増加にして、一は人類の持續是なり。前者は主として男子の司るべき所なるが故に後者の可能性を欠き後者は専ら女子の

任たるが故にひとり之に適するの性を帯ぶ。

また、『我等何を爲すべき乎』では、次のようにも言っている⁽¹⁶⁾。

神に對する女の奉仕は、主として又ほとんど専ら、子を生むことによつて成り立つて居る（それは彼の女を除いてはそれを爲し得ないからである）。男は仕事に依てのみ神や其の同胞に奉仕する様に召命されて居る。（傍線引用者）

約めて傍線部のみ唱えれば、「女は生む事。男は仕事」（『暗夜行路』前編第一ノ九）となるのは偶然にしても、この字句の淵源がトルストイにあるのは間違いないであろう。（トルストイと「暗夜行路」の関わりについては、稿を改めて論じることにする。）

志賀直哉が「清兵衛と瓢箪」と「暗夜行路」（正確にいえば「時任謙作草稿」）を執筆していた大正元（一九一二年）初冬の千光寺山。その棟割長屋の一室にレフ・トルストイ（一八二八〜一九一〇）が同席していたということにならうか。

注

(1) 両者は執筆に要した時間を見ても対照的である。「清兵衛と瓢箪」は原話との出会いから約一ヶ月半で翌年元日の『讀

『賣新聞』に発表されているが、「暗夜行路」は尾道で草稿の執筆を開始する大正元年11月から『改造』の昭和12年4月号での完成までに二十四年余りという気の遠くなるような年月を要している。

(2) 「謙作の追憶」(『新潮』第32巻第1号、大正9年1月)による。「暗夜行路」の序詞「主人公の追憶」の部分は、短編小説「謙作の追憶」として、『改造』誌での連載が始まるちょうど一年前に『新潮』誌に発表された。「謙作の追憶」では、謙作は「母と祖父との不義の兒」であるとその出生の秘密が前書きで明かされている。

(3) 厳密に言えば、この時書いていたのは「暗夜行路」の前身である「時任謙作」という自伝的小説であった。詳細は後述する。

(4) 三軒の棟割長屋の各戸は、南から六畳と三畳の和室と土間という構成であった。志賀直哉が住んだのはこの三軒長屋の東端の一軒であるが、執筆に使用した部屋は瀬戸内海を望む南の六畳間であろう。なお、棟割長屋は現存しており、現在「志賀直哉旧居」として尾道市が管理し、公開されている。

(5) 「創作餘談」(『改造』第10巻第7号、昭和3年7月、『志賀直哉全集』第8巻所収)

(6) 「暗夜行路草稿4」(『志賀直哉全集』第6巻)。なお、こ

の原話をふくむ「暗夜行路草稿4」の画像は『暗夜行路草稿4』の影印と翻字(『尾道文学談話会会報』第2号、平成23年12月)に収録している。

(7) 「稲村雑談(二)」(『作品』第2号、昭和23年11月、『志賀直哉全集』第8巻所収)に、

尾ノ道へ行つたのも實に偶然で、その前、何の事であつたか父と衝突した時、父が貴様は小説などを書いてゐて、一體どういふ人間になるつもりだといふから、馬琴ばきんでも小説家です、然しあんなのは極く下らない小説家です、もつと本統の小説家になるのですといつた。

とある。

(8) 「暗夜行路」前編第二ノ三

(9) 「續創作餘談」(『改造』第20巻第6号、昭和13年6月、『志賀直哉全集』第8巻所収)

(10) (9)に同じ。ただし、「暗夜行路」の前身である「所謂私小説」の標題を「時任謙作」とすることは疑問が残る。拙稿「志賀直哉と尾道」(尾道大学地域総合センター叢書1『尾道の芸術文化』所収、平成19年10月)参照。

(11) この「例外」については、前章で触れたところであるが、直哉自身「續創作餘談」で次のように述べている。

モデルに就いて。主人公謙作は大體作者自身。(中略)

母は序詞に出て来るだけだが、私の實際経験ではこれは祖母だった。父も序詞だけだが、父と角力すまわをとつて、負けて非常に口惜しく感じた経験はある。本文中の陰になつてゐる父も私の父らしい所が多少ある。

と、「暗夜行路」序詞における角力のシーンでの「父」と父・直温との重なりについて言及している。

(12) 大正元年十一月二十九日(金)の日記に「百九十七まで書いてネル」とあるが、これは「暗夜行路草稿」(Ⅱ「時任謙作草稿」)についての記述であろう。棟割長屋に移つて間もなく書かれたと思われる「暗夜行路草稿2」(「尾の道に行くまでの事」)は、この中に含まれていたと思われる(鶴水館から棟割長屋に移動したのは、十一月十六日(土)であろう。十一月十七日(日)の日記に「久しぶりで自分の床にネた」とある)。また、「清兵衛と瓢箪」の原話には、大正元年十一月十二日(火)に接しているから、「暗夜行路草稿2」(「尾の道に行くまでの事」)を執筆する時点では「清兵衛と瓢箪」の原話は直哉の心中に存在していたことになる。

(13) 抹消の理由は不明である。長編「時任謙作」とは別に新たに短編「清兵衛と瓢箪」を仕立てるために抜き出したか。あるいは、この部分で父の行為を悪事としているが、

悪い発達さえも人類の意志の現れとして肯定的にとらえようというこれまでの叙述と齟齬を来すことになるため削除したものか。ちなみに、紅野敏郎氏は『志賀直哉全集』第6巻「後記」で「この「トル」と指定された部分を挿入してみると、この當時の作者のナマの考えがいっそう明白となる」と述べているが、その通りだと思う。

(14) 「暗夜行路」の方は、「女は生む事」という命題を中心にして形成されているように思われる。寺杣「志賀直哉『暗夜行路』の虚美―大乗寺の雙鷺圖をめぐって―」(『尾道大学芸術文化学部紀要』第9号、尾道大学芸術文化学部、平成22年3月)においても、雌鷺の「子を生む爲めの本能」に注目している。

(15) トルストイ『男女観』(橋本青雨譯、金港堂書籍、明治38年1月)

(16) トルストイ『我等何を爲すべき乎』も刊行されている(加藤一夫譯、洛陽堂、大正4年12月)。

(本稿は、尾道市立大学日本文学科3年寺杣ゼミ公開研究報告「志賀直哉『清兵衛と瓢箪』の深層」(平成25年9月14日、尾道商業会議所記念館)の主要部分をまとめたものである。「清兵衛と瓢箪」の本文および志賀直哉執筆の本文は、『志賀直哉全集』(菊判、昭和

48〜49年、岩波書店）に拠った。なお、志賀直哉自筆原稿の掲出（12頁〜13頁）にあたっては、令孫・志賀道哉氏の許諾を得ることができた。感謝の意を表したい。

―てらそま・まさと	日本文学科教授―
―いがらし・けいこ	日本文学科三年生―
―おぎす・けんと	日本文学科三年生―
―せしま・ひろひさ	日本文学科三年生―
―なかむら・あやこ	日本文学科三年生―